

『死とともに生きることを学ぶ』へのコメント

——どうして生きてきたのですか？

菊地建至

はじめに

『死とともに生きることを学ぶ——死すべきものたちの哲学』の著者、竹之内裕文は「どうして生きてきたのですか？」という人生の切実な問いに、本書の中で幾度も立ち返る。「どうして生きてきたのですか？」という問題との継続的で生半可でない関わりから、そしてその問いで対話する他者との関わりから、人生と社会について、知的探究について、人は何を学べるのか。本書はこの課題に取り組む意欲的な哲学書である。

評者が評するのはおもに本書の第5章「限界づけられた生の希望——共に生きること、本当に生きること」、第6章「森と湖の国の「福祉」——他者と共に生きるためのレッスン」、序章「どうして生きてきたのですか？——父との別れと出会い」である。それらのなかでも「どうして生きてきたのですか？」の対話や経験の解釈から考察が展開される。

「限界づけられた生の希望」(第5章)と「どうして生きてきたか」「どうして生きるか」の結びつきはわかるとして、第6章の福祉制度・社会保障制度という公共政策の考察に個人に向ける「どうして生きてきたか」「どうして生きるか」という問いを接続するのは一見すると無理筋にも感じられるが、本書はこれにも取り組んでいる。

本書を貫いているのは、大学1年生の秋に著者に訪れた父との死別、そして「どうして生きてきたのですか？」を父ともっと対話したかったという思いである。また、第5章の主要人物は著者の友人、阿部恭嗣(1955～2008)である。阿部恭嗣さんと著者の出会いは、人生のなかに「デュシェンヌ型の進行性筋ジストロフィー症」(26頁)がある阿部恭嗣さんが地域社会で自立生活を営み始めて間もないころ、著者が大学3年生のことだった。著者は介助ボランティアの一員になり、「ありのまま舎での自立生活(十八年四カ月)、ありのまま舎退去後の再入院生活(二年九カ月)」(27頁)の大半の時期、2人は関わった。第6章の主要人物は引き続き阿部恭嗣、さらに著者の「ダウン症を抱えて生きる息子」(172頁)の竹之内光嗣、スウェーデン社会の人たちである。

本書の率直な読後感を言えば、評者には2つの思いが生じた。一方で、「それはさしあ

たり、わたしの経験に基づく、わたしの探求の歩みであるが、あなたの探求に糸口を与えるかもしれない。あなたがあなた自身の「経験」を築き上げる機縁となるかもしれない。」

(6 頁) という著者の言葉どおり、本書の読書は、評者が我が身を振り返り、経験とその知を深めることに誘われるものであった。他方で、本書の読書を通して、評者には本書についていけない、難しい、そういう思いが終始あった。

「1、本書の論じ方について」と「2、価値観の転換や生きなおしの経験は不可欠か」では、上記の後者の感覚がどういうことかを取り上げる。「3、社会保障と「どうして生きてきたのですか？」」では、個人の生き方の考察だけでなく社会保障制度の考察にさえパーソナルな「どうして生きてきたか」という問いを重視する本書の試みの意義を取り上げる。本書評は通常の意味での学術論文の評とは異なり、著者との対話を続けたいという思いから、また、読者への本書の案内の一環として、各節のおわりに著者への質問を置く。

1、本書の論じ方について

出会った他者に「どうして生きてきたのですか？」を尋ね、そして「どうして生きてきたのですか？」を自分自身問う。一貫してそういう対話で考える著者は、しかし本書で「どうして生きてきたのですか？」の意味を整理し、それぞれの意味の先行研究を順に検討するということはしない。本書では、キーワードの意味についての検討や議論で明確になったことが整理して示され、それをふまえ次の論が展開されるということはないのである。

そうはいっても、著者の「どうして生きてきたのですか？」の意味理解の一端は記されている。

「なぜ生きるのか」と質問したとき、小学生のわたしは、「人はなぜ生きるのか」の一般解を求めていた。「いかに生きる」と無関係に、「なぜ生きる」の解が得られると考えていた。それに対して父は、「それを知るために生きる」と答えた。

「わたしはいかに生きる」、「あなたはいかに生きる」と、主語を補ってみると明らかになるように、「いかに生きるか」は個別的な生の課題である。当時のわたしは気づかなかったが、父の回答とともに、問題は「人はなぜ生きるか」から、「わたしはいかに生きるか」に転換されていたのである。」(16 頁)

また、このような叙述もある。

それはたんなる体験談や生の履歴ではなく、かといって、生き方を離れた一般的考察（「なぜ」）でもなかった。むしろわたしは、おそらくこう尋ねたかったのだ——「あなたは自身の人生で、何に躓き、どんな問いを抱えながら、その都度、どのような選択を下してきたのですか」、つまり「どうして生きてきたのですか？」。「生きる」という課題について、胸襟を開いて、父ともっと語り合いたかった。父の生の声を聞きたかった。それがわたしの率直な思いだった。（19 頁）

そして「生きる」という課題から出発するかぎり、「なぜ生きるのか」と「いかに生きるのか」という二つの問いは、不可分かつ相補的な関係にある。（17 頁）

著者にとっては「どうして生きてきたのですか？」と一挙に問う理由として、これで十分だということなのかもしれない。しかし、「わたしは、あなたは、いかに生きるか」と「なぜ生きるか」が不可分なものであるからといって、それらを別々には論じられないということが導かれるわけではない。

「わたしは、あなたは、いかに生きてきたか」「わたしは、あなたは、いかに生きるか」という問題意識をけっして離れず人生や社会のあり方について考えることはそれ自体どうということなのか。そして、そう考えることが端的に「どうして生きてきたか」を考えることにもなるというのはどのようにしてなのか。いったん問いを分解し、主題を区別して考え、さらにそれらの関係を考えて書く。それは無理なことなのか。また、そういう考察と書き方、論じ方のほうが、他者に理解しやすいということがありはしないか。

評者が本書についていくのが難しい理由の1つは、本書のこの論じ方への抵抗である。たしかに、それは著者が本書で目指すことに適したスタイルで書いてそうなのだから、評価を云々する重点ではない。しかし、具体的な人との「どうして生きてきたのですか？」の対話とそこからの思考というパーソナルなあり方と、人生や社会に関する分析やそれらについて読者も段階的に理解できるように論じて書くこととは、けっして両立しないということではないだろう。そうだとすると著者はなぜ本書でそうしなかったのか。

「なぜ人は生きるのか」と問うのではない仕方で問い、対話し、考え、考察を読者につ

なぐ。そのことが本書で重視されていることは明らかである。そのうえで、著者に尋ねたい。なぜ本書の論じ方がベストだと判断しましたか。評者が上に示したような論じ方では損なわれる重要な何かがあるということですか。

2、価値観の転換や生きなおしの経験は不可欠か

「出会った一人ひとりに対して、わたしは「どうして生きてきたのですか？」と問いかけてきたように思う。その回答は時に、わたしの価値観を根底から覆し、わたしは生きなおすことを迫られた。」(19 頁) このような著者の経験とそこからの知的探究が本書には詰まっている。それが、本書の読書が読者にとってかけがえのない体験となる一因でもあるだろう。

他方で、著者のいうように人生のなかにそうした価値観の転換や逆説を見出すこと、生きなおしの経験がなければ、この社会で障害のある生を肯定することや有限な生に希望をもつことに関与できないのか、という疑問が評者にはある。

父の「死」は、「生」の有限性を照らし出した。「死すべき定め」(mortality)をどう受けとめ、どう生きるのか、この問いとともに、わたしは父との死別後、いくつかの出会いへ導かれた。出会った一人ひとりに対して、わたしは「どうして生きてきたのですか？」と問いかけてきたように思う。その回答は時に、わたしの価値観を根底から覆し、わたしは生きなおすことを迫られた。一つひとつの出会いと対話を通して、わたしは「死すべき定め」とともに生きることを学んできたのである。それは「死すべきものたちの哲学」を探求する歩みであった。本書では、その歩みが共有される。(19～20 頁)

阿部はその半生を賭けて、「共に生きること」と「本当に生きること」を探求した。他者とともに生きることと、自身の生を本当に生きingことは、阿部にとって、いずれも不可欠であり、しかも不可分の関係にあった。共に生き、本当に生きるという挑戦の途上で、阿部は「障害を恵みに変える」という課題に直面した。「障害を恵みに変える」ことで、「限界づけられた生」のうちに「希望」を見いだしていったのである。(156 頁)

著者の語りに過度の重さや大仰さを見るというのは感覚的なことにすぎないとしても、

価値観の転換や生きなおしというほどの実感のない読者には（評者もその1人だと自覚している）本書の「どうして生きてきたのですか？」の実質は理解できないものなのか。人生や社会制度のあり方について探究することはできないか。この問題は、個々人の実感の違いや共感の有無の問題にとどまらない、探究にとって重要な問題である。

ただし、著者と評者が同席した合評会で、評者からの、人生のなかに価値観の転換、逆説を見出すこと、生きなおしというほどのことがなければ、この社会で障害のある生を肯定することや有限な生に希望を見出すことはできないかという問いかけに、著者は「現在はそうは思っていない」「自分にある前提に気づいた」などと答えた。「光嗣が生まれてしばらくは障害がなかったらどういう人生になっていたかなあと感じていたが、現在のわたしは、馴染むというのかな、いまのわたしはダウン症とともに生きている息子がぴったりで、障害は恵みということを逆説とはまったく思っていない」と著者が語ったことも印象深い。

ここでは、読者のために、著者にあらためて尋ねたい。「自分にある前提に気づいた」というのはどのような前提であり、その前提と著者の思考及び生は現在どういう関係にありますか。

そして、価値観の転換というほどの人生経験がない評者自身の現在の関心から、著者に再度尋ねたい。よき生とそれを支えるものについて、また人生や社会制度のあり方について考えぬくために、人生において価値観の転換や生きなおしという理解があったほうがよいのはどういうことに関してですか。

3、社会保障と「どうして生きてきたのですか？」

本書第6章「森と湖の国の「福祉」——他者と共に生きるためのレッスン」は、スウェーデンの社会の仕組みや社会保障制度の実際を記し、その評価を論じる章である。また、その福祉の価値や理念を考察し、著者がそこに探りあてた、生涯森と共にある暮らし、他者と共に生きる社会、それらを基礎にした福祉のあり方について解明する章である。なかでも「パーソナルアシスタンス」という制度とその基礎の思想として著者が見出したものが詳述される。（195～216 頁参照）

それでは、このような社会保障論が、パーソナルな「わたしは、あなたは、いかに生き

るか」「どうして生きてきたのですか？」という問いとどのように結ばれるのか。

著者によるスウェーデンの社会保障の考察・叙述の大半は、現地の特定の人の生き様やその人と著者の関わりの叙述の中でなされている。また、どういう社会であれば阿部恭嗣さんがいかに生きるか、どういう社会であれば竹之内光嗣さんがいかに生きるか、そのことのケアが本章の底流にある。合評会でも著者は、「在外研究でスウェーデンに行って驚いたのは、阿部さんが日本の社会や制度の中で願っていたものがことごとくあった」ということを強調して語っていた。

大きな学びのチャンスは、息子が三歳の春に訪れた。二〇一一年四月から一年間、わたしは家族とともに、スウェーデンで生活することになったのである。スウェーデンは「福祉の国」として知られる。そこで家族とともに生活することで、障害をもつ息子と共に生きる希望が見つかるのではないか。そのような予感と期待に駆られて、わたしたちはスウェーデンへ出かけた。待ち受けていたのは、障害者と共に生きる社会だった。いや、「障害者」だけでない。スウェーデン社会は「子ども」、「女性」、「移民」を「他者」として受け入れ、これらの者たちと共に生きることに挑戦していた。それは「他者」と共に生きる社会だった。前章で紹介したように、阿部恭嗣は生涯をかけて、共に生きること、本当に生きることに挑戦した。阿部に背中を押され、わたしは光嗣と共に生きることを決めた。スウェーデンで暮らしてみると、そこには阿部たちが願った社会生活があった。福祉や教育の現場を訪れるたび、わたしは驚嘆し、その光景を阿部と共有したいと思った。(183～184 頁)

スウェーデンのホスピスで、老人福祉施設で、自宅で、わたしは高齢者や終末期病者との対話を重ねた。それを通してわたしが実感したこと、それは森とともにある生活は豊かな自然観を育み、同時に、各人の死生観に土台を提供しているということである。(190 頁)

今後の社会で福祉制度・社会保障制度の公共政策がどうあるのがよいか。そのことに関心のある本書の読者も少なくないのではないだろうか。評者もそういう関心をもつ1人である。そして、そういう読者からすると、「公共（政策）」の考察と「個人的なこと、個人的な関係」の考察は、混ぜるな危険、そういうものではないかという疑問も出てくるだ

ろう。

しかし、本書は、パーソナルな「わたしは、あなたは、いかに生きるか」「どうして生きてきたのですか？」という問題意識とその対話から考えることの観点から福祉・社会保障の研究にも着手している。

社会制度を論じる際、具体的な、自分にとってのあの人が、ここで生きる、そのことを望むか。この社会を肯定できるか。そういう問いに根を下ろし、徹底してそこから地域や国の社会保障のあり方を考える。もしかするとそれは生活者には当然のことであり、研究者には容易でない、そのような難しさのあることなのかもしれないが、著者のそうした試みは福祉制度・社会保障研究にとっても貴重なものであると言えよう。

とはいえ、方向性はそうだとして、これに関して実際に本書でなされたことには拙速と思われたり、個人的な思い入れに引きずられて検討が十分に至らなかったように思われたりする、気になる箇所もある。1つ挙げると、著者が「「ノーマライゼーション」という思想」(213 頁)、「「当事者管理」という思想」(213～214 頁)、スウェーデン社会の「包括的福祉」(215 頁)などを賛美し、それとの対照で、「日本社会において「福祉」は、特殊な課題を抱える社会構成員のための特殊な問題と位置づけられる。」(214 頁)という認識のもとに「社会福祉」批判を展開するところは(203～216 頁参照)、荒い議論に思われる。

著者に尋ねたい。こうした視角からの著者の社会保障研究の今後の見通しはどのようなものですか。また、こうした視角からの社会保障論の難点があるとすればそれはどのようなことだと著者は考えていますか。